

# 朱塗の筐はこ

野村胡堂

—

「親分、美いい新造しんぞが是非逢わしてくれって、来ましたぜ」

とガラツ八の八五郎、薄寒い縁にしゃがんで、柄がらにもなく、お月様の出などを眺めている銭形の平次に声を掛けました。

平次はこの時三十になったばかり。江戸中に響いた捕物の名人ですが、女の一人客が訪ねて来るのは、少しくす擦ぐったく見えるような好い男でもあったのです。

「何て顔をするんだ——何方どなただか、名前を訊いたか」

「それが言わねえ」

「何？」

「親分にお目にかかつて申上げますって、——滅法めっほう美しい女だぜ、親分」

「女が美よくったって、名前を仰しやらない方にお目にかかるわけには参りませ  
ん。と言つて断つて来い」

平次は少し中ッ腹だったのでしよう。名前も言わない美しい女と聞くと、妙に  
頑固かたくななことを言つて、ガラッ八を追つ払おうとしました。

「悪者に追つ駆けられたとか言つて、蒼い顔をしていますよ、親分——」  
「馬鹿ッ、何だつて冒頭はなつからそう言わないんだ」

平次はガラッ八を搔かき退のけるように、入口へ飛出して見ました。格子戸の中、  
灯あかりから遠い土間に立ったのは、二十三、四の年増、ガラッ八が言うほどの美  
縹きりよう緻じではありませんが、身みな形なりも顔かおもよく整ととのった、確しつり者からしい奉公人風の女で  
す。

「お前さんか、あつしに逢いたいというのは」

「あ、親分さん、私は悪者に跟つけられています。どうしましょう」

「ここへ来さえすれば、心配することはない。後ろを締めて入んなさるがいい」

唯ただならぬ様子を見て平次は女を導みちびき入れました。奥の一間——といっても狭

い家、行燈あんどんを一つ点けると、家中の用が足りそうです。

「親分さん、聞いている者はありませんか」

「大丈夫、こう見えても、御用聞の家は、いろいろ細工さいくがしてある。小さい声で話す分には、決して外へ洩もれる心配はない。——もつとも、外に人間は二人いるが、お勝手に働いているのは女房で、今取次ないしよに出たのは、子分の八五郎と  
言うものだ。少し調子ツ外れだが、その代り内証ないしよの話を外へ洩もらすような気の  
きいた人間じゃねえ」

平次は砕くだけた調子でそう言って、ひどく硬張こわばっている相手の女の表情をほぐ

してやろうとするのでした。

「では申し上げますが、実は親分さん、私は銀町の石井三右衛門の奉公人、町と申す者で御座いますが」

「えッ」

石井三右衛門といえは、諸大名方に出入りするお金御用達、何万両という大身代を擁ようして、町人ながら苗字帯刀を許みょうじたいとうされている大商人です。

「主人の用事で、身にも命にも替え難い大事の品を預かり、仔細しさいあつて本郷妻恋坂つまこいざかに別居していらつしやる若旦那のところへ届けるつもりで、そこまで参りますと、かねてこの品を狙っている者の姿を見かけました。——いえ、逢つたに仔細は御座いませんが、——私の後を跟つけて来たところを見ると、どんなことをしてもこの品を奪い取るつもりに相違御座いません」

お町は、こう言いながら、抱えて来た風呂敷包を解きました。中から出て来

たのは、少し古くなった桐<sup>きり</sup>柢<sup>まさ</sup>の箱で、その蓋を取ると、中に納めてあるのは、その頃<sup>みんじん</sup>明<sup>ひらい</sup>人の飛<sup>かん</sup>来<sup>かん</sup>一<sup>かん</sup>閑<sup>ぼり</sup>という者が作り始めて、大変な流行になつて来た一<sup>かん</sup>閑<sup>ぼり</sup>張<sup>り</sup>の手<sup>て</sup>筐<sup>ぼこ</sup>。もとより高価なものですが、取り出したのを見ると、虞<sup>ぐ</sup>美<sup>び</sup>人<sup>じん</sup>草<sup>そう</sup>のような見事な朱<sup>し</sup>塗<sup>ゆぬ</sup>り、紫<sup>たか</sup>の高<sup>か</sup>紐<sup>ひも</sup>を結んで、その上に、一<sup>ふう</sup>々<sup>いん</sup>封<sup>ふう</sup>印<sup>いん</sup>をした物々しい品です。

「フーム」

銭形の平次も、妙な圧迫感<sup>うな</sup>に唸<sup>うな</sup>るばかりでした。石井三右衛門の使<sup>つか</sup>というのが一通りでない上、朱塗の一閑張の手筐で、すっかり毒気を抜かれてしまったのでしよう。このお町とかい<sup>し</sup>う確<sup>しか</sup>り者らしい年増の顔を、次の言葉を待つともなく眺めやるのでした。

「丁度通り掛つたのは、お宅<sup>たく</sup>の前で御座います。捕物の名人と言われながら、滅多に人を縛らないという義<sup>い</sup>に勇<sup>い</sup>む親分<sup>おやぢ</sup>に願<sup>ねが</sup>いして、この急場<sup>し</sup>を凌<sup>しの</sup>ごうとし

たので御座います。後先も見ずに飛び込んで、何とも申訳御座いません」

お町は改めて、たしな嗜みの良い辞儀を一つしました。

「で、どうしようと言うのだえ、お町さんとやら」

「この様子では、とてもこの手筐てばこを妻恋坂つまこいざかまでは持って参れません。そうかと  
言つて、この儘引返すと、一晚経たないうちに、盗まれることは判り切つてお  
ります。御迷惑でも親分さん、ほんの暫く、これを預つて置いて下さいませんか  
でしょうか」

「それは困るな、お町さん。そんな大事なものを預つて万一のことがあつては  
——」

平次も驚きました。命がけで持って来たらしいこの手筐を、そんなに軽々しく預つていいものかどうか、全く見当も付かなかつたのです。

「親分のところへ預つて置いて危ないものなら、どこへ置いても安心な処は御

座いません。どうぞ、お願いで御座います」

折入つての頼み、平次もこの上は没義道もぎどうに突っ放されそうもありません。

「それは預らないものでもないが、少しわけを話して貰おうか。中に何が入つてるか見当も付かず、後でどんなことになるかもわからないようなことでは、どんなに暢気のんきな私でも心細い」

「それでは、何もかも申し上げます。親分さん、聞いて下さい、こういうわけです、御座います」

## 二

石井三右衛門というのは取つて六十八、配偶つれあいは五年前に亡くなりましたが、たった一人の伴三之助は、年寄わがままそだつ子の我儘わがままそだ育ちで、悪遊びから、到頭勝負事に

まで手を出すようになり、金看板きんかんばんのやくざ者になつて、三年前に久離切きゆうりきつて勘当され、二十五にもなるいい若い者が、妻恋坂の知合いの二階なに為すこともなくゴロゴロ暮しているのです。

銀町しろがねちようの店には、養やしない娘のお縫ぬいという十九になる女と、手代ともなく引取られている甥おいの世之次郎とが、年寄の世話をやいておりますが、どちらも財産目当ての孝行らしくて、三右衛門の気には入りません。

大番頭は禄兵衛ろくべえといつて、名前の通りむずかしい四十男、これは三右衛門に代つて店の支配をし、大勢の奉公人を取締つておりますが、正直一途で、金儲かねもうけや商売のことにかけては、鬼神のような男ですが、家の中の取締りはあまりよく行き届きません。

三右衛門の力と頼むのは、十三の年から足かけ十二年奉公したお町唯一人だけ。これは赤の他人ですが、それだけに、財産に目をくれるでもなく、昔の人



達にはよくあつた本当の主人思いで、半身不随ふずいで寝たきりの三右衛門を、自分の親のように世話をしていたのです。

身代は少なく見積つても十万両。支配人任せで寝ている三右衛門は、力になる身寄がないだけに、その始末が苦になつてなりません。自分の生きていゝうちは、どうやらこうやらやつて行くが、明日をも知れぬ病身になつて見ると、折角きさず築き上げた大身代を、甥おいや養女や、赤の他人に、熊鷹くまたかに餌えさを奪うばわれるように滅茶滅茶にされてしまうのが心外でたまらなかつたのです。

そうかと言つて、今大急ぎで養子を迎えることもならず、生命いのちの灯ともしが次第に燃え尽きるのがわかると、勘当した伴が、つくづく恋しくなつたのも無理のないことでした。

しかし、一旦久離切つた伴の三之助を、死際にこちらから呼び戻すといふのも、昔氣質の三右衛門には出来ず、番頭おひも甥おいも、出入の者も気が付かないのか、

気が付いても、わざと知らん顔をするのか、口を噤んで、そのことには触れてくれませんかから、病身の三右衛門には、どうすることも出来なかつたのでした。

我慢が出来なくなつて、呼寄せたのはお町。

「俺が目を瞑れば、この身代は滅茶滅茶だ。他人に捲り取られてしまふ位なら、——これは内証の話だが——やくざでも血を分けた俵に費われた方が、どんなにいい心持だか知れはしない。俺に万一のことがあつたら、用筆筒の中の朱塗の手筐を、中身ごとそつと妻恋坂の俵へ届けてくれ。その中には諸大名を始め、江戸中の大商人に貸した金の証文が一杯入っている。どんなに下手に現金を掻き集めても、三万両や五万両にはなる筈だ。店の有金は、禄兵衛始め奉公人達にくれてやつてしまひ、土地と家作は、娘と甥に半分ずつやるように、これは別に、遺言状を書いて置く」

こう言い含めたのは、ツイ三日前、その翌る日は三右衛門、二度目の中風に

當つて、正氣を失つたまま、昏々と睡つてばかりいるのです。

こうなると、家の中にはもう、前々から孕んでいた財産争いが具体的になつて、明日をも知れぬ重病人を抛つて置いて、現金や貸金の勘定に夢中になる有様。朱塗りの手筐の証文も、何時誰に見付けられて、奪い去られてしまうものか、全く油断も隙もありません。

お町はこう言いながら、もう一度手筐を平次の方へ押しやりました。

「そんなわけで、今晚という今晚、甥の世之次郎様が、旦那様の枕許の用筆筒へ手を掛けなすつたので、たまり兼ねて持ち出しました。旦那様は二度目の中で御座いますから、お癒りになるものやら癒らぬものやらわかりませんが、道々考え直して見ると、まだ亡くなつたわけでもないのに、あわててこの手筐を持ち出したのは、少し早過ぎたのかもわかりません。——若旦那の三之助様は、それはそれは荒っぽい方で御座いますから、証文をどうかしてしまつた頃、

旦那様が正気に還かえったりしては、私の申訳も立ちません。そうかと申して、外にお願ひするような身寄りもなし、ここへ飛込んだのを御縁に、どうぞ暫くこれをお預り下さいませんか」

平次も暫くは言葉もありません。

大抵のことには驚かないように訓練くんれんが積んでいますが、夢にも見たことのない三万両五万両という大金の証文を、こんな浅間な家に預ることを考えると、さすがに穩おだやかな気持ではいられなかつたのです。

「驚いたな、お町さん。私あつしもいろいろの目に逢つたが、石井三右衛門ともいわれる大金持の身上を、まるごと預るようなことになるうとは思わなかつたよ」

「それが、親分さんの信用で御座います。あまり遅くなると店の方が面倒になりますから、これでお暇いじまいたします。それではどうぞ」

「まア、どうも仕様があるまいが、お前さんはどうするつもりなんだい」

「私はこの桐きりの空箱だけ持って、妻恋坂つまこいざかへ参ります」

「危ないじゃないか、引返しなすつたらどうだい」

「いえ、若旦那の三之助様に親御のお心持も伝え、それに、中身は親分さんに預けてあることも申さなければなりません」

「成程」

「それから、私の後から跟ついてけて来たのは、石井家の身上を狙う悪者に相違ありませんが、誰が本当の悪者なのか、私にもまだ見当は付いておりません。この空箱をおとりにして、そいつの顔が見てやりとう御座います」

恐ろしいきかん気、平次もさすがに、この男まさりの女の顔を眺めやるばかりでした。

「そいつは危ない。いくら宵のうちでも、間違いがあったらどうするんだ。ゴロゴロしている野郎がいるから、そこまで送らせよう」

「いえ、親分。そんなことをしたら、曲者は姿を隠してしまいます。私一人なら、馬鹿にしてこの箱はこを取る気にもなりません。ホ、ホ、ホ」

「そう言ったって」

「こんなに見えても、私は思いの外ほか力が御座います。小男の世之次郎さんなどには負けることじゃ御座いません。ホ、ホ、ホ」

「そいつは豪儀ごうぎだが――」

平次が心配するのも構わず、赤い手筐を置いたまま、お町はいそいそと街の月の中へ飛出してしまいました。

「ガラッ八」

「へエ」

「聞いたか」

「聞きましたよ。驚いた女があるものですね」

「手筐を預つて見ると、俺が飛出すわけにも行くまい。手前直ぐあの女の後を  
跟けて、後苦勞だが妻恋坂まで見届けてくれ。途中でへマをして、曲者に覺ら  
れるようなことをするな」

「大丈夫ですよ、親分。このお月様だ、相手の女が、五六町離れて行つたつて  
匂いでも解りまさあ」

「いやな野郎だな」

「へッ、へッ」

ガラツ八は草履ぞうりを突っかけると、それでもそくさとお町の後を追いました。  
明神様の方へ——。





「親分、た、大変」

「何が大変なんだ、騒々しい」

飛んで来たガラツ八。格子戸へ一ぺん鉢合せをして、ハネ返されて、それからまた開けて、バアと顔を出しました。

「落着いていちゃいけねえ、直ぐ来て下さい」

「どうしたんだよ」

朱塗の手筐てばこは、早くも仕舞い込んだ平次。十手を懐へネジすき込むと、裾すそをつまんで、サツと外へ出ます。まことに慣れた手順で、一分一厘の隙すきもありません。

「あの女が殺されたんで」

「何？」

「明神様の裏の闇へ入ると、妙な物音がしたつきり、一向出て来る様子もねえ。駈け付けて見ると、喉笛のどぶえを切られて、血だらけになってブツ倒れているじゃありませんか」

「箱は？」

「奪られてしまったらしいよ、親分」

「曲者は？」

「まるで見当が付かねえ。二三十間遅れて行ったあつしが、駈け付けると右の通りだ。逃げる間も何にもねえ筈だが、犬っころ一匹飛出さないから不思議な  
んで」

「手前てめえが間拔まぬけなんだよ、急いで行けッ」

「息が切れて叶かなわねえ」

「死骸はその儘にして置いたのか」

駆けながらも平次は、出来るだけガラツ八の口から要領を引出して、事情アウトラインの外形をはつきりさせようとする様子です。

「通りかかった町内の人に頼んで来たんで」

「町内の人とは、どうして判った」

「懐手ふところをして立って見ていたんだもの、町内の人でしょう」

「――」

現場へ行つて見ると、もう五六人の人が立って、騒いでおります。こだち木立と建

物の蔭で、月の光もここまでは届きませんが、近所から持出したものと見えて、ちようちん提灯が二つ。のけぞ街の土に仰反つて、血の海の中にこと切れているお町の死体を、ちようちん気味悪そうに覗いております。

「御町内の方、掛り合いでお気の毒だが、暫く動かずにいて下さい」

平次はそう言いながら、提灯を借りて、お町の死体を見入りました。後ろから喉笛のどぶえを切った時、下手人げしゅにんの顔を見るつもりで少し顔を反らしたらしく、傷は少し左へ外それておりますが、そのために頸動脈けいどうみやくを切られて、一たまりもなく死んでしまった様子です。

仰向けに倒れているところを見ると、多分てぶん手筐てばこを奪い取るために引倒したのでしょう。お町の手は、それでも見覚えの空風呂敷からぶろしきを犇ひしと掴んでおりますが、中の桐箱はその辺には見当りません。

——中を開けたら、曲者もさぞ驚いたろう——平次はツイそんな気持になりましたが、その儘提灯を上げて、死体を取囲んだ五六人の顔を順々に照して行きました。

「八」

「へエ」

「この中に、お前が最初に、死骸の番を頼んだ人がいるか」

「親分、いませんよ」

「本当か」

「本当ですとも、小作りで、——暗くて解らなかつたが猫背ねこぜの男でしたよ。どうも不思議だ」

「何が不思議なものか、それが下手人だったのよ」

「えッ」

「馬鹿だな、相変らず、——お前は先刻さつき、二三十間駆け付けるまでここから逃げ出した者はないと言つたろう」

「へエ——」

「外のんきに隠れる場所はねえ。急場の思い付きだ。多分一度隠れたその塀の間から、暢気のんきそうに懐手をしてノソリと出て来たろう」

「そうですよ、親分。まるで見ていたようだ」

「町内の人のような顔をして逃げたんだ。恐ろしく落着いた野郎だ。年恰好、としかつこう人相、着物などを見なかったか」

「それが親分、下手人と解れば見て置いたんだが——」

「仕様のねえ野郎だな」

「でも、猫背ねこぜとわかつているんだから、これはわけもなく見付かるぜ」

「フーム」

「ね、親分。石井一家のうちからせむし僂僂を探しやアわけはねえ、行って当って見ましようか」

ガラツ八はすっかり得意になりました。本当に飛出しそうにするのを、

「いよいよ馬鹿だなア、女から奪った箱はどこへやったか、お前にも見当は付くだろう」

「その辺の藪へでも捨てはしませんか、どうせ、空っぽと解れば」

「空っぽだって、箱に仕掛けがあるかも知れないだろう。人まで害めて奪った物を、そう易々と捨てるものか」

「すると」

「お前が駆け付けるまでに、背中へ背負ったんだよ」

「えッ」

「飛んだ儂せむしさ。行って聞いて見るがいい、銀町しろがねちょうにはそんな者は一人もないに相違ないから、——町内の人はみんなスラリとしているぜ」

「へエ——」

平次の明察たなじしろう。掌を指すようなのを聞いて、驚いたのは立合いの衆でした。

「銭形の親分だぜ」

「そうだろう。そうでもなくちゃ——」

と言つた囁きを聞くと、

「皆さん、どうか、お引取り下さい。飛んだ御迷惑でした。それから町役人に  
そう言つて、ここへ来るように言伝をお願いします」

平次はもう弥次馬を追つ払います。

「さア、こんな所に立っていると掛り合いになるぞ。帰れ帰れ」

ガラツ八は急に強くなります。

暫く、提灯の灯で、その辺を探していた平次は、やがて、道の上から剃刀を  
一挺拾い上げました。

「親分、好いものが手に入ったネ」

「フム、あまり好過ぎるよ」

かなり使い込んだ剃刀。柄をえ観世かんぜ縵よりで巻いて、生き渋しぶを塗つてありますから、  
ひどく特色のあるものですが、不思議なことに、大して血が付いてはおりませ



ん。

「親分、何を考えていなさるんだ」

「おかし可怪なことがあるよ。新しい齒こぼれのあるところを見ると、かみそり剃刀で切ったには相違ないが、一度血を拭いて、仕舞い込んで、また落したのはどう言うわけだ。——余程あわてたのかな」

「——」

「箱を背中へ入れて、お前をかついだ様子じゃ、下手人は余程胆きものすわっている男らしいが——」

平次は何時までも剃刀を睨んで頸くびを捻ひねっておりますが、さすがにこの謎は解けそうもありません。そのうちに、急を聞いて、町役人が、一隊の弥次馬と一緒にやって来ました。

石井三右衛門の邸は、大変な騒ぎになりましたが、まだ、正気付いたばかりで、二人の医者が詰めつきりで様子ようすを見ている主人の三右衛門には聞かせるわけに行きません。

その中に銭形の平次は、疾風迅雷しつぷうじんらいの如く、仕事を運びました。その晩、第一番に逢ったのは、支配人の禄兵衛ろくべえ、月代の光沢さかやきの良い働き盛りの男で、背は高い方、少し気むずかしそうですが、その代り堅いのと正直なのが看板かんばんで、家中の者が一目も二目も置いております。

「銭形の親分、あの女が殺されては、差向き主人の世話をやく者がありません。幸い、少しずつ正気付いて来るようですが、お町はどうした、なんて聞かれたら、返事のしようがないだろうと、心配していますよ」

支配人らしい行届いた心配です。

「番頭さん、この下手人はどうも家の中の者らしい。御主人があの様子だから、そうぞくあらそ多分、から相続争いに絡んだことじゃありませんか」

「へエ、——そんなことが」

禄兵衛も否定はしませんが、ひどく酔っぱい顔をしております。

「で、お町さんが殺されて、差向きお困りなら、どうでしょう。私の手から一あつし人女を入れたいんだが」

「と言うと?——」

「そう言っちゃ濟まないが、番頭さんはお店が忙しくて奥へは目が届かないだろうし、私も毎日来ているわけにも行きません。幸い、本所の御用聞で、石原の利助親分の娘のお品さん、これは出戻りだが、きりよう縹緞も才智も人並すぐれて、こんなことには打って付けの女です。お町さんの代りに、唯の奉公人という触

込みで七日でも十日でも、ここへ置いてやつちや下さいますまいか」

平次の頼みはもつともでした。こんな大家たいけに起つた事件の解決を、外から、医者が脈みやくを引くようにしていたんでは、何時になつて解決するかわかりそうもなかつたのです。

「それは構いませんとも、早速連れて来て下さい。家の中に親分方の息のかかつた方がいなさると、私達もどんなに心丈夫だかわかりません。何分この節は、嫌なことばかりありますんでね——いや、これは私の口から申上げることではない」

禄兵衛はフツと口を噤つぶみました。

「ところで番頭さん、この剃刀かみそりは、この家の品じゃありませんか」

平次は懐中から、キリキリと手拭てぬぐいに巻いた剃刀を取出し、禄兵衛の手へ渡してやりました。柄えも刃はもよく拭き込んであるので、もう血の痕あとなどは容易に見

付かりません。

「へエ、——これは、見覚えがありますネ。誰のだっけ。何しろ大勢のことですから、忘れてしまいましたが、柄にこんな器用な細工をする者は、たんとはおりません。ちよいと待つて下さい」

禄兵衛はそう言いながら、通りすがりの下女を呼び入れて、剃刀を鑑定かんていさせました。

「お嬢さんのだアよ、番頭さん。家中で一番よく切れる剃刀じゃねえか」

相模訛さがなまりの下女は、何の遠慮もなくそう言つて、アタフタとお勝手へ行つてしまします。

「お嬢さんと言うと？」

「亡くなったお内儀かみさんの遠縁の者で、此家ここの養やしない娘ですよ」

「その娘さんに逢わせて頂きますしうか」

## 五

平次は間もなく、養い娘のお縫ぬいの部屋に案内されました。

十九と聞きましたが、境遇きようぐうのせいか、年よりはふけて、二十二三と言つても通るでしょう。少し陰気な感じですが、素晴らしい美人で、何とか藪蔭やぶかげに咲き誇ほこっている月見草つきみそうを思わせる娘でした。

「お嬢さん、御免下さい」

「お縫は何と挨拶していいか、見当も付かない様子で黙礼しました。

「この剃刀かみそりはお嬢さんのでしょうね」

「え」

「お町が殺された場所にあつたんですが」

「えッ」

見る見るお縫の顔は真蒼になりました。唇からサツと血の気が失せると、眼を大きく見開いて、頬の肉が、いたましい痙攣けいれんを起します。

「暫くお預りしますよ、お嬢さん」

「――」

「今晚 御飯が済んでから、どこかへ出かけませんか」と改めて平次。

「え、どこへも」

「奉公人達は、暫くの間、お嬢さんを見掛けなかつたと言いますが、どこにいなすつたんです」

「ここにおりました」

「ここに？」

「え、私はどうかすると、半日位、誰にも逢わずにここにすることがあります」  
もうこれ以上は訊くこともなかったでしょう。

「お邪魔でした。お嬢さん、お寝みなさいまし」

番頭の禄兵衛を顧みて、今度は店の方へ。

「親分、あのお嬢さんは、人などを殺せるような人間じゃありません。剃刀はお嬢さんのでも、これは私が請合うけあいますよ、誰かお嬢さんの剃刀を持出した奴があるのでしょうか」

「さア」

平次はそれには肯定こうていも否定も与えませんでした。

間もなく、番頭の部屋を借りて、呼出して貰ったのは、主人の甥おいの世之次郎。

「へエ、今晚は、御苦労様で」



店で働いているだけに、如才じよさいのないことはお縫と反対で、敷居しきいざわ際に手を突いて、支配人と平次の顔を等分に見上げました。

小作りで、年の頃二十五六、少し三白眼しろめですが、色の浅黒い、なかなかの男前。なんとなく軽捷けいしやうで抜け目のなさそうな人間です。

「世之次郎さんと言いましたね」

「へエ」

「御主人に万一のことがあると、総領が勘当されていなさるそうだから、お前さんが跡取りというわけかネ」

平次は妙に立ち入ったことをツケツケ言います。

「飛んでもない、親分。そうでなくてさえ、世間の口がうるさくて叶かないません。そんなことはどうぞ仰しやらないように願います」

「まア、いいやな、お前さんは運が好いんだ。それはそうと晩飯の後でどこへ

も出なさりはしまいネ」

「今晚ですか？」

「お町が殺された刻限こくげんに、お前さんはどこにいなすったか訊きたいんだ」

平次の舌は、恐ろしく辛辣しんらつです。

「へエ、——お町は戌刻いっつ（八時）少し前に殺されたって話ですから、その時分

私は町内の銭湯へ行っていましたよ」

「銭湯？ 此家ここでは風呂は立ちませんか」

と平次。

「ありますよ。雇人やといにんが入るんで、毎晩立ちますが、私は疝性かんしょうで、流しの広い、上り湯のフندانにある銭湯でないと入ったような気がしません」

「成程」

「私が内風呂へ入らないのは、家中の者が皆みんなな知っております」

「それにしても、宵よいから銭湯は、遠慮がなさ過ぎはしませんか」

「へエ」

主人の甥おいというにしても、店の者としては少し我儘が過ぎるようです。

「何刻位入なんどきっていましたかい」

「一刻とも入りはしません」

「そんな長湯ですか、お前さんは？」

「へッ、少し稽古けいこ事をしているもんで」

「成程」

小唄の師匠ししやうへ行つて、一刻も変な声を出して唸うなつて、帰りには手拭ぬを濡らし、銭湯へ行つたような顔をするというのは、その頃の大商人の奉公人にはよくあることでした。

これは銭湯と、町内の稽古所を調べさえすれば判ると思つたのでしよう。平

次はそれつきりにして、あとは店中の奉公人、一人一人に逢つて見ましたが、さて、何の手掛りもありません。

## 六

平次と一時張合はりあつて、近頃はすっかり折れてしまつた本所の御用聞、石原の利助の娘、お品——平次の女房お静とは仲好しの美しいお品——は翌る日、支配人ろくべえ禄兵衛の手で、石井家へ入り込みました。

表面は殺されたお町の代り、病人の世話をするといい名儀ですが、実は、お縫や世之次郎をはじめ、雇人やといにん全部を見張るため、お品の骨折りも一通りではありません。

主人三右衛門は、幸い翌る日あたりから、少しずつ意識いしぎを恢復して、お品が

行つてから三日目には、お町のいないのを不思議そうに物問いたげな顔をする  
こともありました。

朱塗りの筐はこは、騒さわぎが一段落済むまで平次が預り、親の三右衛門がお町に大  
事を託たくした心持をくんで、勘当された伴せがれの三之助を石井家へ入れてやろうとし  
ましたが、これは番頭の禄兵衛が強硬きやうごうに反対して、沙汰止さたやみになりました。

三之助は無む法者で、飲のむ買かう打うつの三道樂の外ぐわいに、親の金を持出して、やく、  
ざ仲間にやるのを楽しみにした位の人間ですから、——親旦那の思召しはさる  
ことながら、この家に入れたら、どんなことをするかもわからない、と禄兵衛  
は言うのです。それに、相続争あひつぎいが、深刻しんこくになつてゐるから、お縫ぬいや世之次郎  
と血ちで血ちを洗せんうような三みつつ巴どもえの醜みにくい争あいが始はまるに相違ちがない。旁々かたがた三之助を呼  
び戻すのは、もう少し待まちつて貰もらいたいと言いう言葉ことばにも理窟りくつがあります。

平次も、暫しばくその意見いけんに任まかせて、成行なりゆきを見みました。が、お町を殺ころした下手人

はどうしても判らず、桐の空箱の行方もそれつきりわかりません。

三日目に、番頭の禄兵衛は、店で紙入れを紛失ふんしつしました。縫いつぶしの見事なものでしたが、中には幾らも入っていないから、騒ぐまでもあるまいと、自分の胸に畳んで置くつもりらしい様子でしたが、そんなことは知れ易やすいもので、半日経たないうちに、店中で知らないものはない有様でした。

五日目に、お品は家へ帰りました。平次へ一通り報告した上、父親の利助が、兎角すく身体が勝れないので、それを一晚見てやるためでもあったのです。

全く三右衛門はこの二三日ことの外快こころよく、時々は廻らぬ舌で物さえ言うようになつたので、この様子で三廻りもすれば、もとの身体にはならなくとも、時々帳尻位は見られるようになるだろうと言うほどになりました。

その晩、主人の部屋に泊つたのは、相模女のお村。始めのうちは、大きい眼を開いて、看護みとるつもりでしたが、次第に猛烈に睡気ねむけに襲おそわれると、我にもあ

らず、健康な躰しひぎをかいて寝込んでしまいました。

眼の覚めたのは翌る朝。窓を開けて、朝の光と空気を入れて見ると。主人の三右衛門、頸くびに赤い細紐を巻かれたまま、少し乗り出し加減に、眼を剥いて死んでいたのです。

「ワッ、た、助けてくんろッ」

お村はよつん這いになって飛出しました。

恐ろしい不安を孕はらんだ、ハチ切れるような騒ぎが、猛火の上の鍋たぎを沸たぎらせるように、家の中を煮えくり返らせました。

「誰もここへ入るんじゃないぞ。お前は銭形の親分を呼んで来い。お前は医者だッ」

支配人の禄兵衛が、たった一人でてんてこ舞をしていると間もなく、銭形の平次、子分のガラッ八をつれて飛んで来ました。

続いて、お品、町内の医者、町役人、家の中は唯ただもうごった返します。

「銭形の親分、申訳がありません。たった一晩の油断で」

お品が面目なげに言うと、

「なアに、私はこうなることを見通していたんだ。お品さんが一年泊っていりやア、三百六十六日目にこの家の旦那がやられるよ」

「えッ」

「お品さんは証しょうこ拠こ固がための時役に立つんだ。安心していなさるがいい」

平次はお品を慰なぐさめて置いて、変事のあつた部屋へ行きました。

## 七

「あッ、親分待っていました」



入口に頑張がんばっていたのは支配人の禄兵衛。

「番頭さん、大変なことになりましたね」

「どうしていいか、私には見当も付きませんが、兎に角、ここへは、親分が見えるまで、誰も入れないつもりで頑張っていましたよ」

「それは有難い、早速見せて貰いましょうか」

平次は部屋の中へ入って行きました。中風ちゅうふうに当った半病人ですが、末期まつごの苦しきはさすがに物凄く、物馴れた平次も思わず顔を反そむけます。死人の頸くびに巻いたのは、皮肉なことに、同じ部屋に居眠りしていたお村の赤い細紐ほそひもで、蒲団の裾すその方には、立派な縫ぬいつぶしの紙入れが一つ落ちております。

拾い上げて見ると、中には小粒が少々と、鼻紙だけ。

「この紙入れは誰なのでしょう」

平次がそれを持って部屋から出ると、

「あッ」

一目、番頭の禄兵衛が飛上がりました。雇人達やといにんは顔を見合わせるばかり、口を利くものもありません。

「番頭さんが二三日前に失くしなすった紙入れというのは、それじゃ御座いませんか」

とお品。

「え、そ、そうですね。どうして一昨日おとといなくなった私の紙入れが、そんな所に落ちていたんでしよう」

禄兵衛は齒の根も合いません。

「番頭さん、中を改めて下さい。中身に変りはありませんか」と平次。

禄兵衛は黙って紙入れを取上げましたが、一通り中を検あらためて、

「紙一枚、小粒一つ無くなつてはいません」

まじまじと頸を捻ひねつております。

「番頭さん、心配には及びません。これはお前さんを罪に落そうとする術てですよ。幸いこの紙入れが三日前になくなったことは、大勢の人が知っているようだし、それに——」

平次は部屋に入ると、主人の死体の頸に巻付いた赤い紐を解いて持って来ました。

「この紐で殺したようには見せかけているが、それも細工で、こんな細い紐で、人間一人殺せるわけはありません。——この通り」

平次は両手へ紐を絡からんで引くと、小布を縫こぎれつて拵こしらえた赤い紐は何の苦もなく、燈芯とうしんのようにフツと切れます。

「あッ」

驚き騒ぐ人々を尻目に、平次はもう一度主人の死体のところへ帰って行きま  
した。

「御覧の通り、頸には、絞め殺した時の紐ひもの跡が付いているが、それで見ると、  
刀さの下げ緒おか前掛の紐ひもか、——兎に角、恐ろしく丈夫な一風編あみ方の変った真田さなだ  
紐ひもだ」

「——」  
皆んなはもう一度顔を見合せました。

「番頭さん、濟みませんが、この部屋の隣は納戸になっているようだが、戸の  
隙間から変なものが見えますよ、拾って来て下さい」

番頭の禄兵衛は黙って隣の納戸へ入りましたが、不気味そうに手へブラ下げ  
て来たのは、焦茶色こげちゃいろの丈夫な真田紐。いや丈夫な真田紐の付いた手代の使う前  
掛です。

「あッ、世之次郎さんのだ」

誰かがとうとう口を滑らせました。

「八」

平次が一つ目くばせすると、ガラッ八は飛鳥ひちようの如く、世之次郎の背後うしろへ廻り  
ました。

「野郎ッ、騒ぐな」

手頸からに絡むのは、蛇のような捕縄とりなわ。

「あッ、俺は、俺は何にも知らない」

世之次郎は、あまりのことに、驚くことも忘れたように、口を開いて茫然ぼうぜんと  
立ちつくしました。

「紙入れや赤い紐の細工は器用だが、さすがに叔父を殺した自分の前掛を持つ  
て行くほど胆きもが太くなかったんだな。罰当ばちあたりな奴だ」

妙な羽目になった禄兵衛は、主人筋の世之次郎へ、掴つかみかかりそうな様子を見せます。あまりのことに腹を据え兼ねたのでしよう。

それから十日目、石井一家の騒ぎに関係した者は全部八丁堀の吟味与力ぎんみよりき、笹野新三郎の役宅に呼出されました。

本当の調べは、町奉行でやることにはなっておりますが、大岡越前守とか、遠山左衛門尉のしょうとかいう、後世までも聞えた名奉行は兎も角、大抵のお白洲しらすでは、筋書通りそれを繰り返して口書くちがき拇印ぼいんを取り、最後の言い渡しをするだけであつたのです。

幕末の奉行などは自分で罪人を調べたものは殆どほとんなく、与力も調べの出来るのは余程の傑物えらもので、大抵は岡っ引が引つ叩きながら調べ、お白洲は型だけののであつたとさえ言われております。

この日、笹野新三郎の前に呼出されたのは、石井の支配人禄兵衛、三右衛門の甥世之次郎、これは伝馬町の仮牢かりろうから伴れて来た縄付きのまま、それに養い娘のお縫、勘当されていた伴の三之助、下女のお村、それに銭形の平次と、八五郎のガラッ八と、利助の娘のお品くわが加わりました。

「平次、お前の望み通り、ここへ皆な集めたが、一体何を訊こうと言うのだ」  
笹野新三郎、何か期待するような調子で、微笑を浮かべながら一同を見廻しました。

「へエ、この石井三右衛門一家の騒動は、ひどく手古摺てこずらせましたが、漸ようやく目鼻が付きました。順序を立てて申上げると明神裏でお町を殺したのは、あれは世之次郎では御座いません」

「何？」

新三郎も少し予想外の様子です。

「あの時世之次郎は、銭湯へ行ったような顔をして、町内の小唄の師匠のところへ行つて、黄色い声を張り上げていたことは、大勢の証人があつてたしかで御座います」

「フォーム」

「それに。死骸の傍そばに落ちていた剃刀かみそりは、一度血を拭いて、改めて思い付いて捨てたもので、あれは、余程悪賢わるがしこい奴のやつたことで御座います」

「――」

「お縫でないことは、わざわざ自分の剃刀を捨てて来たのでも解ります。第一お縫は、お町と仲が悪かったそうで、背後うしろから肩へ手を掛けて、馴々なれなれしく剃刀を喉のどへ廻されるまで黙っている筈もなく、それに、下手人が女でないことは、八五郎が見て知っております。背の高い低いなどは、ほんの一寸の間ならどうにでも誤魔化ごまかせます」



「成程」

「それから、主人の三右衛門を殺したのも、世之次郎では御座いません」

「えッ」

平次の話の途方もなさに、新三郎始め、庭先に列ならんだ一同思わず声を出しました。

「三日も前から、番頭の紙入れかみいを盗んで、それを証拠にしたと言うのは、少し細工が過ぎます。紙入れを盗めば騒がれるに決っておりますから、そんなものは証拠になりません」

「――」

「それほど細工の上手な世之次郎なら、何もわざわざ自分の前掛まえかけで、叔父を紋め殺すようなことをするまでもない筈です。紐や縄はどこにでもあります。――

――その真田紐さなだひもを、覗けば見えるような隣の部屋へ抛ほうり込んで、燈芯のように弱

い赤い紐なんかを巻いて置くのも細工が過ぎて本当らしくありません」

「成程、理窟だな」

新三郎もすっかり引入られました。

「私がお品さんをあの家へ入れて置いたのは、下手人がお品さんに見せようと思つて、どんな細工をするか、それが知りたかつたのです」

「それだけ解つているなら、どうして冤むじつの世之次郎を縛つて、真実ほんとうの下手人げしゅにんを逃して置いたのだ」

笹野新三郎は、改めて平次に訊ねました。

「それは旦那、下手人に油断させて、尻尾を出させたかつたからで御座います。

そうでもしなければ、私の腹の中で見当を付けているだけで一つも証拠というものはありません。世之次郎には気の毒ですが、叔父の敵討のために苦勞したと思つて、あきらめて貰うよりほかに仕方ありません」

「その証拠は何だ、下手人は誰だ」

「もう申上げるまでもないようです。あの顔を御覧下さい」

ハッと思うと、平次に指された支配人の禄兵衛ろくべえは、立ち上がって庭口へ逃げようとしているのでした。

「逃げるのか、野郎ッ」

飛付いたガラツ八、力だけは二人前もあります。あツという間に禄兵衛を叩き伏せ、犇々ひしひしと縛り上げてしまいました。

「あの野郎です。店から現金げんきんで一万両も持出して、妾を二人も困かこっております。三右衛門が丈夫になって、帳尻ちやうじりを見たら一たまりもありません。それに、

三右衛門が死んで、世之次郎を罪に落せば、総領の三之助は人別を抜かれておられますから、あとはお縫一人、あの大身代が支配人の自由になります。朱い手筐てぼこの証文を、三之助へやるまいとしたのも、つまりは行々ゆくゆく自分のものにするつも

りだったので御座います」

平次の説明は疑いを挟む余地もありません。

「そうか、太い奴があるものだな。すぐ口書くちがきを取って、奉行所へ引いて行け。

皆の者、御苦勞であつた。別して世之次郎は氣の毒だ。三之助が跡目あとめ相統濟んだ上は、よく世話をしてやるがいい」

笹野新三郎はこう言つて立上がりました。平次には別に褒め言葉もありませんが、平次に取つて、その優しい眼が、雄弁に手柄を讚美さんびしているので十分だつたでしょう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝春秋オール讀物號」昭和七年十一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

朱塗の筐



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>